（第３種郵便物認可）

市民タイムス　平成２６年（2014年）１２月２８日　日曜日（10）

リレーコラム

食卓が勉強机

吉村　幸代

爪

ある夏の日、何気なく母の素足に目をやると、指先が腫れていた。母の足指は巻き爪で、伸びた爪が肉に食い込んで炎症を引き起こす。前に爪を切ったのはいつなのか。伸びて丸まった母の爪先は、獣のそれのようだった。

平成21年春に父が他界した後、とみに気が回らなくなっている母が気にはなっていた。視力が低下しているようだとも感じていた。だが、不覚にも私は、よもや母が自分で足の爪を切れなくなっているとは思ってもみなかった。

当時、私は公民館長として多忙を極めていた。昼間は当然のことながら、夜間にも会議、休日には地区行事。「公民館長を続けてほしい。家と庭と農地を守ってほしい。自分をひとりにしないでほしい」という母の願いを叶えるために、夫が私の実家に住み込んだ。私は仕事を終えると安曇野の実家へ直行し、早朝5時から草を取り、松本市の自宅に立ち寄ってシャワーを浴びて、始業時刻8時半に寿台公民館へ駆け込む日々を送るようになった。

「忙しい」という漢字は「心を亡くす」と書く。疲労困憊し時間に追われる私は、苛立ちと焦燥に追い詰められて「しっかりしてよ、お母さん」などと声を荒らげた。

母は坂道を転がり落ちるように自分だけの世界に入っていった。それが夫を亡くした喪失感からだけでなく、大きな衝撃と絶望からの逃避でもあると私は察していた。人が全てを忘れ去る病を得るのは、楽になるためかもしれない。ならば仕方ないのではないか。だが、しっかり者の母が壊れていく現実が、容易に受け止め切れようはずもない。

病状が悪化すると入浴もままならず、介護施設を頼るようになった。入所先で食事が摂れなくなるまでに長い期間は要しなかった。痩せて鼻孔に管が入った寝たきりの母。会いに行くのも辛く、私は心の中で呟いた。「お父さん、お母さんを迎えに来てよ」

「要介護5となり三年もういいという言葉さえ失くせり母は　（武蔵野市）田島千代」。朝日歌壇掲載の短歌に、思わず境遇を重ね涙した。

平成26年も残り半月となった早朝、母は静かに天に召された。亡父が「不思議なところが似るものだな、親と子は」と私の手を取り、「お母さんと爪の形がそっくりだ」と笑ったことを思い出す。母の足指の爪を切ってあげたのは、あの夏の日の一度だけ。私は幾度も切ってもらったのに。

母を弔う日、安曇野の空はどこまでも青く、雪を纏った穂高連峰が輝き映えていた。

（よしむら・さちよ、前寿台公民館長、主婦＝松本市）